

巻頭言 「総合学習支援センター開設5周年に寄せて」	
総合学習支援センター センター長 関田一彦 ……1	
[SPACE] 創価大学ラーニング・コモンズ [SPACE]	
開館5周年記念特集 ……2	
[WLC] WLC セルフアクセス・センター (SAC) における	
学習者の自律性を促す取り組み ……5	
[CETL] FD・SDセミナー 報告 ……7	
2018年度 第9回学士課程教育機構FD・SDセミナー (AP事業報告会) ……8	

総合学習支援センター開設5周年に寄せて

総合学習支援センター センター長 関田一彦



創価大学最大のラーニングコモンズ、SPACEは昨秋、開所5周年を迎えました。学期中は一日延べ2000人以上が利用する国内屈指のコモンズです。その管理運営も含め、SPACEを拠点に、様々な学習支援を提供しているのが総合学習支援センター（以下、センターと略す）です。このセンターと筆者の関わりは、その構想段階から数えれば10年、センターの前身である教育学習活動支援センター（当時）の時代を含めれば20年近くになります。5周年の佳節を機に、センターの今までについて簡単に振り返り、今後の展開について少し所感を述べます。

センターの前身である、教育・学習活動支援センター（Center for Excellence in Teaching and Learning, 以下、CETLと略す）は、2000年にオープンした本学のFD拠点です。2013年、中央教育棟竣工を機に総合学習支援センターが分離・新設されるまで、教員の教育力向上と学生の学習力向上の両方を支援・促進する部署でした。このCETLは開所当時から、学習相談窓口を設け、レポート作成講座など課外プログラムを提供して参りました。リメディアル教育の一環として、「マスマスキャンペーン」と呼ばれた数学のピアラーニングプログラムも、2008年度から3年間、企画・運用しました。2009年度には大学教育・学生支援推進事業【テーマA 大学における教育の質保証の取り組みの高度化】の一つとして、本学の「初年次・導入教育を支える学習支援体制整備」プロジェクトが採択され、CETLがその推進組織となりました。そしてこのプロジェクト申請にあたり、取り組みのゴールを総合学習支援センター開設と定め、補助金事業の4年間を準備期間としたのです。その4年間で様々な試行錯誤して積み重ねた知見が、今のセンターの基礎になり、2014年度から取り組み始めたAP事業にも活かされています。

具体的にはHelp Deskと呼ばれるカウンターでは一般的な学習相談だけでなく、学業不振に悩む学生のカウンセリングも受け付けています。特に、学部の指導教員

と連携した学習支援はオアシス・プログラムと呼ばれ、毎学期、十数名が利用しています。また、付設の日本語ライティングセンターでは、レポート作成にあたりコーチング的な指導や診断を行っています。特に、ASTAC (Academic Skills Training Across the Curriculum) と呼ばれるアプローチを重視し、初年次セミナーや学術文章作法といった共通科目と連携することで、その科目で学んだ学習スキルのより確かな定着を図っています。今はライティングが中心ですが、図書館と連携して読解技能・読書力向上に資する新たなサービスの提供を模索しています。

高校までに学習習慣が身につかず、学習の仕方や技術が未開発な状態で大学に入学してくる学生は一定数います。本学では、初年次科目と呼ばれる科目群を設定し、学習スキルの習得だけでなく学習態度や学習意欲の形成・向上に努めていますが、正課だけでは十分な理解・習熟に至らないケースも散見されます。単位を取るために与えられた課題を提出することに汲々として、そこで学んだ知識・技能を自らの学習改善と積極的につなげて考えようとしめない限り、せっかくの初年次教育も一過性のものになってしまいます。本学ではアクティブラーニング型の授業は珍しくありませんが、せっかく能動的に学ぶ機会があっても、それを活かそうとしない（あるいは活かしかたを知らない）学生を見ると、とても残念です。

SPACEの利用者の半数以上は1年生です。1年生のうちに、自らの学習姿勢と向き合い、自らの学び癖や学習観に気づくことは、その後の学業に有効です。そこでSPACEでは、自分が身につけつつある知識や技能を確認し、その活用を考えるための振り返りを促し、支援する機会やスタッフの提供を進めたいと考えています。本学が取り組むAP事業では、学年進行で学生自身が自らの成長変化を振り返る機会を授業の中に組み込むことを奨励しています。そうした活動を支援するSAの養成に積極的にかかわることで、学習スキルを学ぶ意義や活かしかたに注意を向ける、メタな学習スキルを育てる学習支援に取り組んで参ります。



開館5周年記念シンポジウム

2月23日（土）、ラーニング・commons SPACe開館5周年を記念して、commons内のラーニングアリーナにてシンポジウムを開催し、学内外から約40名の方が参加しました。

関田センター長による開会挨拶の後、本学を代表して、田代康則理事長より「語学にもっと力を入れればよかったという卒業生の声から、留学生スタッフと会話を楽しめるスペースとしてワールド・ランゲージ・センター（WLC）を1999年に設立、2000年には学習支援に力を入れようと教育・学習支援センター（CETL）を設立した。SPACeはこの2つのセンターを組み合わせ、新たな学習拠点として2013年に開設した。この5年間で約200万人の学生が利用し、学生の好評を得ている。今後も大学としてSPACeを中心にさらなる教育力の向上に力を入れたい」とのご挨拶がありました。続いて、山崎めぐみ副センター長から「SPACeのこれまでとこれから」と題して、SPACeの取組み報告が行われました。

次にSPACe開設当時、助教として学習



シンポジウムの様子

支援に携わった齊藤幸一氏（広島修道大学学習支援センター）、嶋田みのり氏（東北学院大学ラーニング・commons）、木原宏子氏（同志社大学ラーニング・commons）の活動報告が行われました。齊藤氏は、SPACe開設前後は「ハコの中カミをつくる」時期であったと振り返り、現在の職場に深化し、つなげることができていると報告されました。嶋田氏はSPACe開設からの3年間の様々な経験が今の職場で活かしていると多数の写真を用いてご紹介になり、木原氏は、SPACeの学生スタッフの育成や学習セミナーを中心に振り返り、現在の職場で活かしていること、新しく求められていることについて話されました。



田代康則理事長



齊藤幸一氏（現広島修道大学学習支援センター）

ひきつづき質疑応答では「SPACeの課題は」「学生の利用率の高さの要因は」との質問に、「外部への発信力が必要ではないか」「教員との連携や授業と結びつけることがポイント」等の応答がなされました。最後に、望月CETLセンター長より挨拶があり、本シンポジウムは閉会となりました。

SPACe200万人達成

4月29日昼過ぎ、来場者数が200万人に達しました。200万人目とその前後賞の3名の学生に大学を代表して田代理事長より図書カードが贈呈されました。

200万人目の学生、法学部2年 園田開さん（写真左から3番目）は「SPACeの存在は、自分が高校3年生の時、初めて創価大学のオープンキャンパスに来た時に知りました。とてもキレイで設備も良く、こんな素晴らしい環境で勉強したい!と思うきっかけになりました。本当に理想の空間だと思います。」と驚きと喜びを語ってくれました。



創価大学ラーニング・コモンズ「SPACE」

<https://www.soka.ac.jp/space/>

総合学習支援センター

総合学習支援センター（SPACE） 2018年度秋期報告

Help Deskサービス

Help Deskでは4つの方針に基づいて学習支援を行っています。

- ① サービスを利用してくれる学生が自己管理をすることができる。
- ② サービスを利用してくれる学生が自立した学び手になる。
- ③ サービスを利用してくれる学生が自分の夢や目標を明確に持つことができ、達成するための計画を立てることができる。
- ④ サービスを利用してくれる学生が計画したことを実行に移すことができる。

これら4つの中で、目の前にいる学生が何を必要としているのかを質問をしながら来談者自身が明確になるように働きかけています。

学習相談

2018年度秋学期の学習相談サービスを利用した学生は218名でした。GPAで見ると、3.0以上の学生が多く利用してくれたことがわかります。上記に述べたHelp Deskの目的を考えると、GPA 2.0～3.0の学生にもっと利用してほしいと思います。特に秋学期は、1年生であっても春学期の成績が出た後なので、履修相談やこれからの大学生活の目標設定・自己管理能力のありかたなどを相談していただきたいと思います。

2018年度春学期から始めたピア・サポートという継続して学習サポートを行う取り組みは、秋学期にも新たに希望者を募集し、26名が参加しました。この取り組みは、学習意欲はあるけれど、モチベーションが続かない学生向けのもので、参加者の感想として、「自身で時間管理ができるようになった」、「早めに課題を終わらす習慣が身についた」、「計画を立てると勉強がはかどるようになった」などが寄せられました。

学習セミナー

さらに、秋学期もHelp Deskスタッフが考えた学習セミナーを開催しました。

10月	レポートの書式がよく分からない… ワードの使い方
11月	～大学生活を謳歌しよう～GPA5.0取得者が語るやる気向上&タイムマネジメント講座
	Let's write Emails in Nihongo!!!
12月	知らなきゃ損!! プレゼンを成功させる方法
	ここではつまづきたくない! 現役就活生によるSPI講座
	ディスカッションに説得力向上を! 大学院生が教える論理的思考術
	その情報、どこで入手した? 良い探し方を学ぶ情報収集講座

この他にも、English Medium Program（英語のみで学士課程を修了できるプログラム）の学生向けにExcelを統計処理のために使う方法を教えるセミナーも実施しました。

オアシス・プログラム

SPACEでは学部生スタッフによるHelp Deskサービスに加え、臨床心理士など、専門家が担当しているオアシス・プログラムがあります。このプログラムは、カウンセリングと学部生スタッフによる学習相談の間に位置付けられています。例えば、成績不振による面談、指導対象となってしまう、次学期に成績を上げる必要があるが、単純な学習スキルや自己管理能力の向上・改善のみでは難しいと考えられる場合や、授業での学習活動に何らかの難しさを感じていて、素早い改善が難しいと考えられる場合があります。オアシス・プログラムスタッフが学習面での伴走者となり、大学生活のより良い環境づくりをサポートします。原則的に教員アドバイザーと連携をすることを特徴としていますが、最近増えてきているケースとして、学生が履修している授業担当教員から紹介される場合があります。このままいくと成績に影響を及ぼす状況で介入が必要な場合がこれにあたります。学生は平均週1回面談し、もし面談に来なかった場合にはスタッフが電話等で連絡・コンサルテーションを行います。また、必要であれば学内外の関係部署と連携をとり、必要な学習支援を行っています。2018年度は春・秋学期合わせて70名の学生が利用しました。

ワークショップ

オアシス・プログラムの一環として、2018年度はグループ活動が苦手な学生向けのワークショップも行いました。秋学期が始まる前の夏休みと、春学期が始まる前の春休みで来る学期の授業活動に向けて、グループ活動に慣れていくことを目的としています。同じ不安を共有する仲間と1日活動することにより、苦手意識を克服していきます。参加者からは、「自分の考えを表現することができた」、「参加さえできればグループ活動は苦ではないというのがわかった」、「アサーティブトレーニングが有益だった」といった感想をもらいました。創価大学ではアクティブ・ラーニング型の授業が増えてきているため、このようなワークショップを継続的に開催したいと思います。

日本語ライティング・センター

日本語ライティング・センターでは、昨年来レポート診断からレポート・チュータリングに重点を移行してきました。その結果、2018年度レポート診断は179名、レポート・チュータリングは890名、計1069名の学生が利用しました。

主な利用者は学術文章作法を履修している1年生でした。授業と連動した課外サービスとしての利用です。今後はレポートの書き方を教えてくれる授業のみでなく、その他の授業のレポート作成にも利用してほしいと思います。

また、日本語ライティング・センターは図書館と共同で「ブックトーク」、「アクティブ ブック ダイアログ（1冊の本を分担して読み、要約し、プレゼン発表する参加型読書

会・今回の対象本は水野敬也『夢をかなえるゾウ』)、「アニメーション（読書の楽しさを伝え、生まれながらに持っている読む力を引き出そうと開発・体系化した読書指導メソッド）」、というイベントを行いました。参加者からは「一日の終わりに『今日はこの本のあの一節がよかったな』といえるように本と近くなっていきたい」「一冊の本をみんなで協力して読むと楽しいと思った」「みんなで1つの本について話し合うことがなかったので、楽しく新鮮だった」「読んだ内容をまとめるのが難しかった」など感想をもらいました。

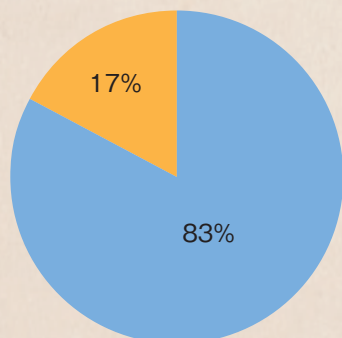


2018アクティブ ブック ダイアログ



アニメーション

■ チュータリング ■ レポート診断



2019年度もSPACeでは様々なサービスを提供していきたくと計画しています。ポータルサイトからお知らせが流れます。是非、活用していただければと思います。

WLC セルフアクセス・センター (SAC) における 学習者の自律性を促す取り組み

■ WLC SAC の新たな挑戦 2018年度

SACはWLC開設以来、英語及び英語以外の外国語を教室以外の場所で学ぶ機会を学生に提供する場として発展して来ました。その後、SPACEの一部として新しいセンターへ移り、今日では、全学から多くの学生が訪れ、チャット・クラブ、イングリッシュ・フォーラム、ライティング・センターなどを活用しています。WLC SACのコーディネーターやマネージャーは、創価大学が昨今重点的に取り組んでいる、自らの学びを自ら管理出来る学生像を追求するため、学生が自律的に施設やプログラムを使いこなせる機会を増やそうと昨年度以来、一層努力して参りました。強制ではなく選択肢があることで、学生はより外国語を学びたいという気持ちになりより多くの力を注ぐようになります。SACでは2018年度、学生の自律的学びを促進するため様々な方法を試みました。

まず、チャット・クラブとイングリッシュ・フォーラムの推奨利用回数を7回から5回に減らしました。確かに、学期中に7回プログラムに参加すれば、学生はSACのサポートを最大限に利用していると言えるかもしれません。しかし、学習者の自律性は、彼らに選択権を与えることで促されます。参加は5回とすることで、余裕をもってSACを体験し、プレッシャーから開放され、本当の意味でのやる気が起きることが期待されます。これがSACを運営する教員や

スタッフの願いです。次に、ハロウィーン・ゲーム大会や、演劇を通して英語を学ぶ集い、TOEICなどのテスト対策や言語学習ストラテジーを身につけるワークショップなど、以前よりも多くのイベントを企画しました。学生が参加できる機会を増やし、また参加者には証明書を渡し、教員に提出すれば追加ポイントがもらえるという新しいイベント参加証明書システムを立ち上げ、学生のやる気アップのための工夫をしました。このようなシステムがあることで、忙しい学生も参加意欲が増すことでしょう。最後に、水曜日を「WLCオープンデー」とし、プログラムを提供せずにWLCラウンジを学生に開放しました。ランチタイムからSACの終了時間まで、学生は設備を自由に使い、一人で勉強したり、グループでプロジェクトを進めたり、スピーチやプレゼンテーションの練習をすることができるようになりました。



■ WLC SAC 更なる発展を目指して 2019年度

今年度は、これまでの積み重ねを基盤とし、更なる外国語学習の機会を学生に提供していきたいと考えています。まず、WLCラウンジが解放される水曜日に来る学生のために、語学学習アクティビティを提供します。英語のボードゲームをしたり、カードを使ってディスカッションをしたり、外国語の本、新聞などを読むことができますようになります。新しい取り組みを通し、これからもますますSAC

を利用してもらえるよう学生を励ましていくつもりです。次に、イベントやワークショップの開催を継続していきます。学生の要望に応じて、イギリス、オーストラリア等の国々への留学に必須であるIELTSのワークショップを開きます。学生の興味を引きつけ、英語や諸外国語にもっと力を注いでもらえるよう楽しいイベントも続けていきます。インスタグラムなどのソーシャルメディアを駆使した新しい周知方法を模索し、イベントへの参加者を増やしていくつもりです。

Global Village Event #2



最後に、2018年度はSACが中央教育棟に移って以来、大きな変革もたらされた初めての年と言えるでしょう。スタッフ、マネージャー、コーディネーターの尽力により、SACは自律する学習者育成という目標を核とした、SACの本来あるべき姿に近づくことができたことと自負しています。今年度も、これまでの経験を生かし、学生により多くの学びの機会をもたらすよう努めていきます。

■ 第14回 Global Lecture Series 2018年11月30日

今回の講演は国連大学サステナビリティ高等研究所、いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニットから永井三枝子氏を講師としてお招きし、“Understanding Different Cultures for Sustainable Development”とのテーマで異文化理解とコミュニケーションスキルの視点から「持続可能性」に焦点を当てて行われました。永井氏はまず、モンゴル、フランス、タイの3カ国での自身の異文化体験について説明しました。その後、各国で見られる文化の違いについて、参加者であればどのように感じ、どのような行動を起こすか質問を投げかけました。

続いて、現代を読み解くキーワードである「持続可能な開発目標 (SDGs)」の達成に取り組むことは、即ち、異なる文化的背景をもつ人々と共に働くということであると強調しました。そうした人々と同じ目標に向かい共に働くためにはコミュニケーションスキルを効果的に使い、文化の違いを乗り越える必要があることについても言及しました。そのためにはまず、どんなに小さなコミュニティでも差異があり、それを認識することが大切であると説明しました。差異の存在を、実感を持って捉えるため、参加

者は近くに座った者同士でも価値観が異なることを知るグループワークも行いました。

最後に永井氏は、持続可能な社会を創生していくために人々が持つべき認識を共有して講演を締めくくりました。それらは、異なる文化的背景や価値観を持った人間同士のコラボレーションから斬新なアイデアが生まれる、異なる社会基準を分析し、受容し、活用する力が今後ますます重要になるという認識でした。第14回のGlobal Lecture Seriesは「持続可能性」について、参加者が日々の生活の中で実践可能なアイデアを得る貴重な講演となりました。



■ WLC プロフェッショナル・ディベロップメント

2018年度秋学期には、ランチタイムセッションが2回、イブニングセッションが1回、プロフェッショナル・ディベロップメントの一環として開かれました。10月11日にはコリン・ランドルWLC副センター長が、学生の学びのプロセス、内省能力、批判的思考、情意的・人間的成長を促すのに有効なジャーナルライティングを具体的な指導法やタスク、事例も交えながら紹介しました。2回目は11月20日、竹内香織助教と中塚絵梨佳助教により、ニーズ分析に基づく、学生が興味・関心を抱くトピックの紹介がありました。この結果を基にコミュニケーション能力育成を目的とする英語科目において有効なタスク中心のアクティビティが提案されました。イブニングセッションは11月7日、尾崎秀夫WLCセンター長によって行われました。まずWLC第2ステージに向けてセンターのビジョンが紹介され、WLCミッションステートメントに即した新しいプロジェクトと方向性が示されました。新しいセルフ・アクセスプログラムや海外留学プログラムについての説明の後、認

知・メタ認知能力の融合を目指し、それぞれの認知能力を促進するペアやグループワークの実施方法やアクティビティなどが、研究の成果をもとに発表されました。3回のセッションは好評のうちに幕を閉じました。これらは全て録画され、使用された資料と共にWLC教員共有フォルダーに保存されています。



■ WLC 教員の紹介 キャメロン・ハイ 講師



キャメロン・ハイ講師はWLCに在籍して3年になります。WLC English Festival 運営チームの一員であり、チット・チャット・クラブのスタッフ採用とトレーニングに従事しています。担当科目は1年生向けのEnglish I, II, グローバルビジネスのためのスタディスキルなどです。最近では法学部生向けに、平和と人権研究に焦点を当てた科目、IELTS や TOEFL対策科目などを担当しています。また、ビジネス英語コミュニケーションを経営学部1年生に、グローバルビジネススキ

コミュニケーションを様々な国籍を持つ同学部2年生に教えています。ハイ講師は2006年の来日以来13年間英語教育に携わってきました。中学、高校、予備校などでセンター試験準備コースを教え、2012年度から2016年まで立教大学で教鞭を執りました。学歴としては、2001年ロンドン大学キングス・カレッジで地理学を専攻し、優等学位で卒業後、2005年レディング大学で国際関係論の修士号を取得しました。研究分野はスピーキングの流暢さと動機付け自己システムです。ハイ講師はまた、TOEFL とIELTS 試験準備のためのテキストも出版しています。

第5回FD・SDセミナー 2018年10月12日(金) 16:45~18:15

講義等において、教員の話す力やプレゼン力を向上させる目的で、講談師の玉田玉秀斎氏を講師としてお迎えして第5回学士課程教育機構FD・SDセミナーを開催しました。この回は、学生の参加も認めています。

玉田氏には、「プレゼン力を高める講談の話術力」をテーマに、①講談との出会い、②講談の歴史と現状、③会話や講演における重要な点、④講談の魅力と特質等についてご講演いただきました。また、参加者全員で講談の基本である、「修羅場読み」を行い、その独特な語り方を体験しました。

60名(教員:30名、職員:4名、学生:24名、学外

参加:2名)の方に参加いただき、アンケートには、「伝わる話、人を惹きつける話をする上で大きなヒントが沢山ありました」「日本語をリズムに乗せる、という点に感銘を受けました」「プレゼンで一番大切なのは『自信』であることを改めて学ばせていただきました」等の声が寄せられました。



講談師の玉田玉秀斎氏

第6~8回FD・SDセミナー

第6回FD・SDセミナー	2018年11月9日(金) 16:45~17:45
第7回FD・SDセミナー	2018年11月30日(金) 16:45~18:10
第8回FD・SDセミナー	2018年12月14日(金) 16:40~18:20

各学部の特徴ある授業実践を大学全体で共有することを狙い、「特色ある授業実践から学ぶ(1)~(3)」と題し、第6~8回学士課程教育機構FD・SDセミナーを開催しました。

特色ある授業実践から学ぶ(1)では、「学生の質問態度向上に関する授業実践(教育学部:戸田大樹講師)」、「授業設計研修を受けての工学系専門科目における授業改善の試み(理工学部:井田旬一教授)」をそれぞれテーマとして、授業の取り組みにおける効果や今後の課題についてご報告いただきました。

戸田講師より、「質の低い質問」と「質の高い質問」について改めて学びあった上で、グループ及び個人で質問を作成し発表を行なったところ、質問に対する態度の向上と質問量の増加という結果が得られたとの報告がありました。

井田教授より、工学系専門科目にアクティブラーニングを導入し、それまでの一方向の講義と復習中心の授業から予習も行い、グループ学習等の双方向授業も取り入れた。難解な数式も身近な事例から馴染みやすくしたところ、学習時間の増加や成績の向上が見られたとの報告がありました。

学内の教員23名の方にご参加いただき、アンケートでは「すぐに授業に取り入れられるアイデアもあり有益でした」「知識習得型の授業でもアクティブラーニングが可能であることを知りました」等の声が寄せられました。

「特色ある授業実践から学ぶ(2)」では、「卒業論文研究における同僚会議の導入効果(経済学部:碓井健寛教

授)」、「ゼミの学習の活性化—授業以外での学び(文学部:高橋正教授)」、「授業収録の活用と今後の展望について(eラーニングセンター:木村富美子教授・久米川宣一講師)」をそれぞれテーマとして、授業の取り組みにおける効果や今後の課題についてご報告いただきました。

学内の教職員24名の方にご参加いただき、アンケートでは「演習の進め方について、新しい方法の可能性を考えることができた」「フィールドを活かすことの大切さとコツを知ることができた」「授業収録を補講として使うことを検討したい」等の声が寄せられました。

「特色ある授業実践から学ぶ(3)」では、「英国GPプログラムにおける英語学習の認識の変化(経営学部:志村裕久准教授)」、「議論を通して学生の積極的な授業参加を向上させる授業実践(法学部:ウルヴハンセン講師)」、「シミュレーション学習を活用した災害看護論の授業展開(看護学部:鈴木恵子教授)」、「International Fieldwork(マレーシア短期研修)(国際教養学部:杉本一郎教授)」をそれぞれテーマとして、授業の取り組みにおける効果や今後の課題についてご報告いただきました。

28名(教員:26名、職員:1名、学外教員:1名)の方にご参加いただき、アンケートでは「先生方の特徴あるアクティブラーニングの状況が把握でき有意義であった」「授業や留学プログラムで有用な内容を学ぶことができた」「こうした情熱ある先生方の教育があってこそ学生たちが伸びることができると感じた」等の声が寄せられました。



特色ある授業実践



大学教育再生加速プログラム

2018年度 第9回学士課程教育機構FD・SDセミナー（AP事業報告会）

2018年度第9回学士課程教育機構FD・SDセミナーとして「大学教育再生加速プログラム（AP）事業報告会」を、2月23日（土）本学中央教育棟AW303教室で開催し、学内外の大学関係者等約64名が参加しました。

開会に先立ち、馬場善久学長が挨拶に立ち、「昨年の3月にAP事業の中間評価が発表されました。本学が高い評価を得ることができたことは、様々な関係者のご努力によって得られたものです。関係者に深く御礼を申し上げたいと思います。本学の取り組みはALについて長い歴史をもっており、その継続性が評価されています。



馬場学長

昨年発表された「高等教育のグランドデザイン」でも学びの質保証の再構築が謳われており、学生が入学してどういう力を身につけたのか、どういった教育のシステムがあって質保証がなされているか、そういったことを明確にすることが社会からの要請であると考えます。

今後、高等教育の無償化によって、大学が社会から要求されるものも多くなります。皆様のご協力をいただいて更に学習成果の可視化と教育の質保証ができる大学に発展してまいりたいと考えています。」と話しました。

続いて、総合学習支援センター長の関田一彦教授が、2018年度のAP事業における成果指標の達成状況と今後の取り組みなどを報告しました。

最後に、京都大学・理事補、高等教育研究開発推進センター長・教授の飯吉透氏が「AI時代の大学での学び」と題し、記念講演を行いました。講演では、過去50年間でのテクノロジーの

変化について比較、概観した後、現在起きている教育分野の劇的な変化、人とAIが担う役割の変化、オープンエデュケーションによって仕事と学びがシームレスに融合する事例などについて紹介があり、教育に関するあらゆる前提や固定観念の再検討の必要性を訴えられました。最後に飯吉氏は、「様々な形で大学という組織と社会や個人との関係が変わってきています。皆さんが今後ご自身の大学で「何のため、何を、どのような教え、学ぶのか」といった基本的なところに立ち返って考えるべき時期にきているのではないかと思います。」と述べました。



飯吉教授

参加者からは、「アクティブラーニング授業、初年次教育の重要性・意義を改めて確認できました」、「AI、情報技術を活用した教育事例を幅広く知ることができ、この点が有用でした。」、「この先、どうしていけば良いか。どう有益な形で現実の大学教育に活かしていけるのかを考えていく必要性を感じました」などの声が寄せられました。

【セミナー概要】

開催日時：2019年2月23日（土）12：50～15：40

開催会場：創価大学 中央教育棟AW303教室

講師：飯吉透氏（京都大学 理事補（教育担当）／高等教育研究開発推進センター長・教授）

内容：AP事業取組報告 関田一彦（教育学部教授）

記念講演「AI時代の大学での学び」飯吉透氏

参加者：64名（学内教員：41名、学内職員：5名、学外教職員：14名、企業団体：4名）

2019年度学士課程教育機構FD・SDセミナー FDフォーラム開催スケジュール（予定）

回数	開催日	講師	演題（仮）
第1回	5月24日（金）	望月雅光（教育・学習支援センター長）	FD入門
第2回	6月8日（土）	安永悟氏（久留米大 文学部教授）	LTD入門
第3回	6月21日（金）	特色ある授業実践から学ぶ1	
第4回	6月29日（土）	JPFシンポジウムと共催／佐藤昌宏氏（デジタルハリウッド大学大学院教授）	
第5回	9月7日（土）	初年次教育学会と共催	
第6回	11月8日（金）	佐藤広子（学士課程准教授）	読解力向上につなげる教職学協働の取り組み
第7回	11月22日（金）	特色ある授業実践から学ぶ2	
第8回	12月6日（金）	朴勝俊氏（関西学院大学教授）	心をつかむプレゼンテーションの技法
第9回	3月7日（土）	鈴木克明氏（熊本大学教授）	インストラクショナル・デザイン

第5回 教育フォーラム(第17回FDフォーラム)・AP事業報告会

開催日時：2019年10月19日（土）午後

会場：創価大学 中央教育棟 AB102教室

基調講演：深堀聰子氏／九州大学 教育改革推進本部 教授

学士課程教育機構 新任教職員紹介

- 教員 教育・学習支援センター（CETL） 副センター長 大場隆広（経営学部 准教授）
- WLC 講師…富田浩起 助教…ノーシン アーイシャーカーン メイ ナカツカ
- SPACE 助教…柴田香奈子 鈴木道代 寺本羽衣
- 学士課程 講師…羽賀文湖



創価大学

創価大学学士課程教育機構ニュースレター [SEED] 第17号
発行日 2019年5月24日
発行者 創価大学学士課程教育機構
〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236
http://www.soka.ac.jp/seed/

